

非認識論証因における存在・非存在の関係性

龍谷大学大学院文学研究科仏教学専攻 博士後期課程二年
道元大成

0. 問題の所在

インド哲学において、存在していないものを非存在だと決定するのは如何なる根拠の基で可能かという問題については、仏教のみならず、様々な学派で議論されてきた。仏教における認識論・論理学を大成したダルマキールティ (Dharmakīrti, ca. 600–660) は、推論 (anumāna) における理由概念を自性論証因 (svabhāvahetu)・結果論証因 (kāryahetu)・非認識論証因 (anupalabdhihetu) の三種類に分類する。その中の非認識論証因が、否定的側面についての論証であり、三種類の論証因の中でも最も詳細に論じられているものである。ダルマキールティの著書の一つである *Hetubindu* (以下では、HB と略す) は、これら論証因に焦点を当てたものである。

HB 中の非認識論証因で繰り返し取り上げられるのが、否定対象とは別なものの存在 (anyabhāva) に基いて否定対象の非存在 (abhāva) が立証されるべき属性 (sādhyadharma) として立証されるのか、或いは否定対象とは別なものの存在と否定対象の非存在との両者とも論証因に相当するものなのかという問題である。後述するように、ダルマキールティは両者とも論証因であるという立場に立脚する。一方で、アルチャタ (Arcata, ca. 710–770) による *Hetubinduṭīkā* (以下では、HBṭ と略す) での主な対論者となっているクマーリラ (Kumārila, ca. 600–650) は、否定対象とは別なものの存在は論証因とはならないと主張する¹。

本稿では、何故、クマーリラが否定対象とは別なものの存在と否定対象の非存在とが等置されないと主張するのかを明らかにするために、

彼の存在と非存在の把握のあり方を中心に検討する。更に、アルチャタが、そのクマーリラ説を批判する箇所に基づいて、ダルマキールティやアルチャタとクマーリラ思想の差異を HBT を基に比較検討する。

1. 非認識論証因における論証因の内容

まず、ダルマキールティは非認識論証因において、否定対象の非認識・否定対象とは別なものの認識・否定対象の非存在・否定対象とは別なものの存在の四要素を等置する。以下にそれを示す。

HB 26,3-7

atropalabdher upalabhamānadharmatve tajjñānam upalabdh-
iḥ. tasmād anyopalabdhir anupalabdhīḥ, vivakṣītopalabdher
anyatvāt, abhakṣyāsparśanīyavat paryudāsavṛttiyā. upalabh-
yamānadharmatve viṣayasvabhāva upalabdhīḥ svaviṣayavijñ-
ānajanānāyogyatālakṣaṇaḥ², yogyatāyā bhāvarūpatvāt. tas-
mād anya upalambhajanānāyogya eva svabhāvo 'nupalabdh-
iḥ pūrvavat³.

ここで、認識が認識主体の属性である場合には、認識とはその
[認識主体の] 知である。非認識とはその [認識主体の知] とは別
な認識である⁴。何故ならば、[非認識という表現は] 相対否定
(paryudāsa) により、[否定対象とは別なものを⁵] 指示すること
によって、[非認識は「認識」という表現によって] 意味される認
識とは別なものだからである⁶。例えば食されるべきでないものや触
れられるべきでないものの如くである⁷。[一方で認識が] 認識対象
の属性である場合には、認識とは自らの対象についての認識を生ぜ
しめる能力を特徴とする対象の本質 (viṣayasvabhāva) である。
何故ならば、能力は、存在を性質とするからである⁸。非認識とは、
その [否定対象である壺などの本質] とは別なる、正に認識を生ぜ
しめる能力がある本質である⁹。以前に述べられた如くである¹⁰。

HB ではまず、認識を、認識主体の属性である場合と認識対象の属性である場合とに分ける。その内で、認識が認識主体の属性である場合には、認識とは認識主体の知である。一方で、認識が認識対象の属性である場合には、認識とは認識対象についての知を生じさせる能力を特徴とする対象の本質である。そして、非認識に関しては、anupalabdhiの nañ接辞を相対否定の意味、つまり、文法学上の anyatva の意味で捉え¹¹、非認識を否定対象の認識とは別な認識と定義する。従って、否定対象の非認識と否定対象とは別な認識とが等置されている。

更に、認識が認識対象の属性である場合には、認識が対象の本質となっていることから、認識と存在性が等置されている¹²。それを先の定義と照らし合わせれば、否定対象の非認識は否定対象の非存在であり、否定対象とは別なものの認識は否定対象とは別なものの存在となる。

従って、否定対象の非認識は、否定対象とは別なものの認識であり、また否定対象の非存在でもある。更に、否定対象の非存在も、相対否定によって否定対象とは別なものの存在である。このことから、否定対象の非認識・否定対象とは別なものの認識・否定対象の非存在・否定対象とは別なものの存在のそれぞれが等置されることになる。例えば、否定対象である壺が認識のための特徴を備えているにも関わらず認識されず、場所のみが認識される場合、壺の非認識・壺とは別な場所の認識・壺の非存在・壺とは別な場所の存在が、等価なものとして扱われる¹³。

そして、ダルマキールティによる非認識論証因における特徴的な点として、否定対象の非存在は、立証されるべき属性ではなく、論証因であるということが挙げられる¹⁴。従って、否定対象とは別なものの存在である場所に基いて、否定対象の非存在である壺の非存在を立証するのではない。非認識論証因における立証されるべき属性となるのは、非存在に関する行為 (abhāvavyavahāra) である¹⁵。

2. クマーリラ説における存在と非存在との別異性

次に、クマーリラの非存在と存在との別異性について検討する。先

に示したように、ダルマキールティは、否定対象とは別なものの存在と否定対象の非存在とを同等なものとして見做していた。それに対して、クマーリラは、存在と非存在とを等価なものとして扱うダルマキールティを批判し、存在と非存在との両者の別異性を主張する。

HB 27,1f.

katham anyabhāvas tadabhāvo yenānyabhāvarūpānupalabdhyā 'bhāvavyavahāraḥ sādhyate'¹⁶.

【対論者】（クマーリラとイーシュヴァラセーナ）

何故、[否定対象とは] 別なものの存在がその [否定対象の] 非存在であろうか。もしそうであるならば、[否定対象とは] 別な存在を性質とする非認識によって非存在に関する行為が立証されるであろうか。

HBT 175,10-17

kumārilo 'py evaṃ manyate, yevaṃ jñātṛjñeyadharmalakṣaṇā dvidhā 'nupalabdhir abhāvarūpā tvayocyate, tasyā bhavatu nāstitājñānaṃ prati sādhanabhāvaḥ. kin tu sa evānyasya pratiśedhyaviviktasya vastunaḥ, pratiśedhyajñānād anyasya vā tajjñānasya, yo bhāvo bhāvāṃsaḥ, sa katham abhāvaḥ pratiśedhyasya, tajjñānasya vā katham abhāvāṃsaḥ. nai va yujyate, dharmarūpatayā bhāvābhāvāṃsayor bhedāt saty api dharmirūpeṇābhede, tayos codbhavābhibhavābhyāṃ grahaṇāgrahaṇavyavastheti.

また、クマーリラも同様に [以下のように] 考える。汝によって述べられた、認識主体の属性と認識対象の [属性] とを特徴とし、非存在を性質とするこの二種類の非認識は、存在しないことの知 (nāstitājñāna) に対する能証であるはずだ。しかしながら、同じその [能証] は否定対象を欠いた別な実在物についてであるか、或いは、否定対象の知とは別なその [否定対象を欠いた実在物の] 知についてであるかのいずれかであろう。およそ存在を部分とす

る存在なるものが、どうして否定対象の非存在であるのか。或いは、その知に、どうして非存在という部分があるのか。[そのようなことは、]決して正しくない。何故ならば、基体というあり方として区別がないとしても、存在と非存在との部分には、属性をあり方とする点で区別があるからだ。そして、両者（存在と非存在との部分）の顕在（udbhava）と伏在（abhibhava）とに基いて、把握と非把握とが確立される。

まず、一連の議論を示す。上記に挙げられた HB での対論者説を、アルチャタは、イーシュヴァラセーナとクマーリラとによる反論と解釈する。その上で、アルチャタは、まずイーシュヴァラセーナ説を紹介し、次にクマーリラ説を提示する。その内、HBTで述べられたクマーリラ説が上記である。HB では、その対論者説に対する論難がなされるが、その内の前半部分がイーシュヴァラセーナ批判であり、後半部分がクマーリラ批判となっている¹⁸。紙面の関係上、本稿ではクマーリラ説に関する議論のみを取り上げて考察する。

まず、アルチャタによるクマーリラ説に則れば、クマーリラは非認識を存在しないことの知を導出する論証因とする。クマーリラ説における非存在という認識手段（abhāvapramāṇa）に関して、その認識結果は存在しないことの知（nāstitājñāna）である。この存在しないことの知は、ミーマーンサー学派における直接知覚など五種類の認識手段が働かないこと、つまり非認識によって導き出される認識結果（pramāṇaphala）であり、否定対象の非存在を意味する。そしてその存在しないことの知が認識手段となって、対象の取捨選択が新たな認識結果として引き起こされる¹⁹。この対象の取捨選択は、非認識論証因が用いられる場合の立証されるべき属性である非存在に関する行為と一致する。従って、非存在に関する行為が導出される際に、ダルマキールティの主張では非認識によって直接的に導出され、クマーリラの主張においては間接的に導出されるという違いはあるものの、非存在に関する行為を引き起こすことという点では、クマーリラもダルマキールティもその見解を違わない。しかしながら、否定対象とは別なもの

の存在が論証因になるか否かに関しては見解を異にする。ダルマキールティは、先に確認したように、否定対象の非認識・否定対象とは別なものの認識・否定対象の非存在・否定対象とは別なものの存在の四者は全て論証因として扱う。一方で、クマーリラは、否定対象とは別なものの存在と否定対象とは別なものの認識という存在性と、否定対象の非存在・否定対象の非認識という非存在性とが、等価なものとすることを否定する。従って、非認識を別なものの認識とする、否定対象を欠いたもの、つまり、壺を欠いた場所が壺の非存在であるというダルマキールティの主張と異なるものである。クマーリラはその根拠として、存在と非存在とに違いがないということはありません。

そして、HBTでは、この注釈の直後に、存在と非存在との別異性を示すŚV abhāvapariccheda 20が引用される。関連する文脈を含めて以下に示す。

ŚV abhāvapariccheda 18-20

na tāvad indriyair eṣā²⁰ nāstīty utpadyate matiḥ /
 bhāvāmśenaiva saṃyogo योगyatvād indriyasya hi //18//
 nanu bhāvād abhinnatvāt samprayogo 'sti tena ca /
 na hy atyantam abhedo 'sti rūpādivad ihāpi naḥ //19//
 dharmayor bheda iṣṭo hi dharmyabhede 'pi naḥ sthite /
 udbhavābhibhavātmatvād grahaṇaṃ cāvatiṣṭhate //20//

「存在しない」というこの考えは、諸感官によっては決して発生しない。というのも、能力に基いて、感官は存在の部分のみと結合するからである (v. 18).

【対論者（ニヤーヤ学派）】 [非存在は] 存在と異ならないことから、その [非存在] と [感官と] の結合がある。

【立論者】 [そうではない.] というのも、我々にとって究極的に [存在と非存在とが] 無区別であることはないからである。色などの如く²¹、この場合（存在と非存在との場合）も [究極的な無区別はない] (v. 19). というのも、基体の無区別が確立され

るとしても、我々にとっては〔存在と非存在との〕両者の属性の区別が認められるからである。そして、〔存在と非存在とは〕顕在と伏在を自体とするから、把握と〔非把握〕とを確立する (v. 20).

まず、ニヤーヤ学派などから感官と対象との接触を六種に分け、その内で、感官と結合したものについての限定者に基いて、非存在が把握されるという反論が提示される²²。一方で、クマーリラは存在しないという知は感官知などの認識手段によって把握されるものではないと主張する。感官知はあくまで存在しているのものを把握する際の認識手段であって、非存在を把握する場合には、非存在という認識手段が用いられなければならないからである。そして、クマーリラは、存在と非存在とが同等なものでないと主張する²³。その根拠として、感官との結合の有無²⁴と、属性としての差異の二つを挙げる。その内で当該の問題となっている存在と非存在との同一性の有無について、クマーリラは、その属性は究極的に異なるものであると論じる。その究極的に異なる属性とは、顕在と伏在とである。そして、その顕在に基づいて把握を、伏在に基いて非把握を確立するのである。但し、そのような顕在という属性と伏在という属性は、互いに相反するものであるため、同一基体に両立することは認められない²⁵。

では、非存在を把握しようとする際に、クマーリラ説に基づけば、どのようにして把握されるのか。それを以下に示す。

NR 341,17-26 ad. ŚV abhāvapariccheda 26²⁶

bhūtalarūpaṃ hīndriyaśaṃyuktaṃ sadrūpaṃ prakāśate, tad eva ghaṭasaṃyuktātmatayā indriyeṇāśaṃyuktaṃ asadrūpatayā ghaṭasūnyaṃ bhūtaḥ ityāti. tathā ghaṭo 'pi yadā yatrendriyasannikṛṣṭaḥ²⁷, tadā tatra sadrūpatayā pratīyate 'sti ghaṭa ityāti yadā yatrāsattayā pratīyate nāstīha ghaṭa ityāti, tatra bhūtalasaṃyogābhāvātmanā ghaṭa eva pratīyate na bhūtaḥ, ghaṭasūnyatayā bhūtalasya saptamyā paraviśeṣaṇa-

tvāt. yadā tad eva viśeśyate, tadā ghaṭasūnyam bhūtaḥ
iti pratīḥ, ghaṭasamyoḡitvenāvidyamānam ity arthaḥ.

実に、感官と結合した地面の性質が、存在を性質とするものとして顕現し、同じそれ（地面の性質）が、壺との結合を自体とする感官と結合しないと、非存在を性質とするものとして、「地面は壺を欠く」と〔顕現する〕。同様に壺も、およそ、感官と接触する場合に、「壺は存在する」という存在を性質とするものとして理解される。およそ、ある場所において、「壺はここに存在しない」という非存在なるものとして理解される場合、そこにおいて、地面との結合の非存在を自体とする〔感官〕によって、壺だけが理解されるのであって、地面が〔理解されるのでは〕ない。何故ならば、壺を欠いていることによって、地面が第七格として、一方（壺の非存在）を限定するものだからである。正にそれ（地面）が〔壺の非存在によって〕限定される、その場合には、地面は壺を欠くと理解されるのであり、壺と結合したものとしては、現存していないという意味である。

ここでは、存在と非存在とがどのようにして把握されるのかについて言及されている。NRによれば、存在の側面では、地面が感官と結合することによってその存在が理解され、同様に壺も感官と結合する場合には、壺の存在が理解される。一方で、非存在の側面としては、場所と壺の非存在との間にある限定者・被限定者の関係によって、二様で理解される。まず、壺の非存在が限定者となって地面を限定する場合には、「地面は壺を欠く (ghaṭasūnyam bhūtaḥ)」という nom. + nom. 構文で理解される。また、地面が限定者となって壺の非存在を限定する場合には、「ここに壺は存在しない (nāstiḥa ghaṭaḥ)」という loc. + nom. 構文で理解される。地面と壺の非存在のいずれかが限定要素となるかの差異はあるものの、壺の非存在が限定者・被限定者の関係に基いて把握されるということが、非存在として把握されるあり方なのである。

3. クマーリラ説に対する反論

クマーリラは存在と非存在とを異なるものとして考えていた。しかしながら、上で確認したように、ダルマキールティは、否定対象の非存在は、相対否定によって否定対象とは別なものの存在を示すとあった。では、その否定対象の非存在と否定対象とは別なものの存在とのあり方はどのようになっているのか。クマーリラの主張する存在と非存在との別体説に対する、アルチャタの答えを以下で検討する。

HB 27,4f.

tasyāsaṃsr̥ṣṭarūpasya bhāvasiddhir evāparasyābhāvasiddhir ity anyabhāvo 'pi tadabhāva iti vyapadiśyate.

【立論者】 [対立する別な事物と] 結合していない本体を有するその [別な事物の] 存在 (場所など) の成立こそが他方の非存在の成立である。従って、別な [事物の] 存在であっても、その [否定対象の] 非存在であると [我々は] 呼ぶ。

HBṬ 176,19-177,4

kumārīlasyāpy uttaram āha, **tasyānyasya** pratiyoginā vastvantareṅ**āsamsr̥ṣṭarūpasya**. na hy asau vastvantaraiḥ saṃsr̥ṣṭasvabhāva ekarūpaḥ. tathātve hy abhāvāṃśo 'pi na kvacit sidhyet. tasyaivaṃvidhasya **bhāvasiddhir eva** bhāvāṃśasiddhir eva **aparasya** pratiyogino vastvantarasyā**bhāvasiddhir** abhāvāṃśasya tvadabhimatasya siddhir astu bhāvāṃśasyaivābhāvāṃśarūpatopapatter iti manyate. tathā hi abhāvāṃśo 'pi pararūpāsamsr̥ṣṭatayaivābhāva iti vyapadiśyate, anyathā tadayogāt. sā ca bhāvāṃśasyāpi samāneti sa evābhāvo 'stu tannimittasya samānatvāt, kim anyenābhāvāṃśenopagatena²⁸. ata evāsamsr̥ṣṭarūpasyeti viśeṣaṇam. yata evam **iti** tasmād **anyabhāvo 'py** anyasya vastuno bhāvo 'pi tvadabhimato bhāvāṃśo 'pi na kevalam abhāvāṃśas tvanmatyā

'bhāva iti vyapadiśyate 'smābhiḥ. tato bhāvāṃśasyābhāvā-rūpatā saṅgataiveti na kiñcid virudhyata iti.

またクマーリラに対しても [以下のように] 返答を述べた。対立する別な事物（非存在）と結合していない本体を有するその別なものに関して [という意味である]。というのも、この単一な性質を有するものは、別な諸事物と結合した本体を有するのではないからである。というのも、そのようであるならば（対立する別な諸事物と結合するならば）、非存在の部分すら、いかなる場合にも成立しないであろう。それ [即ち] そのような [事物の] 存在の成立こそが、[即ち] 存在の部分の成立こそが、他方の [即ち] 対立する別の事物の非存在の成立 [即ち] 汝（クマーリラ）が主張する非存在の部分の成立でなければならない。何故ならば、存在の部分にこそ非存在の部分という本体を有することがあるのが妥当だからであると考える。即ち、非存在の部分も、正に他体と結合していないことによって非存在であると呼ばれる。そうでなければ²⁹、その [非存在の部分] はありえないからである³⁰。存在の部分にとっても、その [他体と結合していないこと³¹] は同様である。従って、その [存在の部分]こそが非存在でなければならない。その根拠は同じだからである。別な非存在の部分を認めるのが、何になろうか。だからこそ、「結合していない本体を有する」という限定詞がある。以上のようなので [即ち] 従って、別なものの存在であっても [即ち] 別な事物の存在であっても [即ち] 汝の認める存在の部分であっても、汝の認めるような単なる非存在の部分ではないが、[否定対象の] 非存在であると我々は呼ぶ。従って、存在の部分が非存在を特質とすることは全く妥当である。従って、何ら撞着しない。

HB では、クマーリラに対する反論として、否定対象とは別なものの存在に、非存在と「結合していない本体を有する」という限定詞が付与されるような否定対象とは別なものの存在こそが、否定対象の非存在であると述べられる³²。ここでの「結合していない本体を有する」

という限定詞について、アルチャタは論理的側面と存在論的側面との二様の非結合と解釈する。論理的側面では、場所を認識する際に、単一の認識手段の作用（ekapramāṇavyāpāra）によって、場所の措定（pariccheda）と場所以外のものの排除（vyavaccheda）がなされる。更に、場所と場所以外のもので全ての存在が包摂されることによって、場所と場所以外のものとは別に第三の種類がないという排中律の関係を示唆することも一つの認識手段の作用とされる³³。この場合に、場所は、場所以外のものに包摂された壺と論理的側面で結合していないものといえる。また、存在論的側面でも、場所は壺と結合していない。場所のみが存在し、壺は存在していない状態において、一方は存在し、他方は非存在であるから、場所と壺という両者の存在性は当然結合するものでなく、存在している場所は他方の壺と結合していないといえる。つまり、結合していない本体を有するとは、存在性の点での非結合をも指す。従って、場所が壺と結合していない本体を有する場合、場所は論理的にも壺と結合しておらず、また存在論的レベルでも壺と結合していないことになる³⁴。もし、非存在と存在という二項関係が成立しないのであれば、存在も非存在も成立しないことになってしまう。このような限定詞が付与される場合、壺の非存在は、他体である場所の存在と存在論的に結合することはないため、存在しないと言える。同様に、場所のみが存在している場合、他方の壺と存在論的に壺と結合することがないため、場所の存在は、壺の非存在を意味することになる。以上の点から、他体と結合していない本体を有する存在は、非存在を性質とすることに過失はない。このように、両者の他体との結合性の非存在という観点から、存在と非存在とを等置し、そのことから、否定対象とは別なものの存在であっても、否定対象の非存在と等価なものとして扱われるのである。

4. 結論

非認識論証因が用いられる際に、ダルマキールティは、非認識が相対否定の働きによって、否定対象とは別なものの認識を指示すること

から、否定対象の非認識と否定対象とは別なものの認識とが等置されると主張する。また、認識が認識対象の属性である際に、対象の認識と存在性とが等価なものとされることから、否定対象の非認識は否定対象の非存在と述べる。以上のことを踏まえると、否定対象の非認識・否定対象とは別なものの認識・否定対象の非存在・否定対象とは別なものの存在の四者が全て論証因となっている。

一方で、クマーリラは、存在と非存在とは相反する属性であるため、同一基体に両者は両立しえないと主張する。それによって、否定対象の非存在と否定対象とは別なものの存在とが同じ論証因となることを否定する。そして、如何にして非存在が把握されるかについては、否定対象とは別なものの存在と限定者・被限定者の関係を基にして解釈していた。壺の非存在が把握される場合には、地面と限定者・被限定者の関係にあるものとして理解されるのである。

そのようなクマーリラ説に対して、ダルマキールティ側は否定対象とは別なものの存在と否定対象の非存在とが等価であることを、「結合していない本体を有する」という限定詞でもって説明する。壺と場所とは論理的にも存在論的にも結合していないことになる。場所の存在と結合することのない壺は存在し得ず、そのことから、場所の存在は壺の非存在でもあり、両者を等置することが可能となるのである。

キーワード

非認識論証因・abhāvapramāṇa・存在・非存在・Hetubinduṭīkā

参考文献

一次文献

- HB *Hetubindu* (Dharmakīrti) : *Dharmakīrti's Hetubindu*, ed. Ernst Steinkellner, China Tibetology Publishing House and Austrian Academy of Sciences Press, Beijing - Vienna, 2016.
- HB_b *Hetubindu* (Dharmakīrti) : *Dharmakīrti's Hetubinduḥ, Teil I, Tibetischer Text und rekonstruierter Sanskrit-Text*, ed. Ernst Steinkellner, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien, 1967.
- HBṬ *Hetubinduṭīkā* (Bhatta Arcata) : *Hetubinduṭīkā of Bhatta Arcata with the sub-commentary entitled Āloka of Druveka Mīśra*, eds. Sukhlalji Sanghavi and Shri Jinavijayaji, Oriental Institute, Baroda, 1949.
- HBṬ_{MS} *Hetubinduṭīkā* (Bhatta Arcata) : Manuscript preserved in Hemacandrācārya Jain Jñān Mandir, Paṭan (Śrī Sanghavi pada Bhadar No. 201[2]).
- HBṬĀ *Hetubinduṭīkāloka* (Druvekamiśra) : see HBṬ.
- Kāśikā *Kāśikā* (Sucaritamīśra) : *Mīmāṃsāslokaṅkārikā, Sucaritamīśrapraṇīṭayā Kāśikākhyaṃ Tīkāyā sametaṃ*, Part III, ed. V. A. Ramasvami Shastri, University of Travancore, Trivandrum, 1943.
- MS *Manusmṛti* : *Manusmṛti with the commentary Manvartha Mukṭāvalī of Kullūka Bhaṭṭa*, ed. J. L. Shastri, Motilal Banarsidass, Delhi, 1983.
- NBhū *Nyāyabhūṣaṇa* (Bhāsarvajña) : *Śrīmad-ācārya-Bhāsarvajña-praṇīṭasya Nyāyasārasya svopajñam vyākhyānam Nyāyabhūṣaṇam*, ed. Svāmī Yogīndrānanda, Vārānasī 1968.
- NM *Nyāyamañjarī* (Jayanta Bhaṭṭa) : *Nyāyamañjarī of Jayantabhāṭṭa with Tīppañ-Nyāyasaurabha*, Vol. 1, ed. K. S. Varadacharya, Oriental Research Institute, Mysore, 1969.

- NR *Nyāyaratnākara* (Pārthasārathi Mīśra) : *Ślokaṅvārttika of Śrī Kumārila Bhaṭṭa, With the commentary Nyāyaratnākara of Śrī Pārthasārathi Mīśra*, ed. Svāmī Dvārikādāśāstrī, Tara Publications, Varanasi, 1978.
- PVA *Pramāṇavārttikālaṅkāra* (Prajñākaragupta) : *Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārtikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta : Being a commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavārttikam*, ed. Rāhula Śāṅkṛtyāyana, Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, Patna, 1953.
- PVSV *Pramāṇavārttikasvavṛtti* (Dharmakīrti) : *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, the first chapter with the autocommentary, text and critical notes*, ed. Raniero Gnoli, Serie Orientale Roma 23, Rome, 1960.
- TSP *Tattvasaṅgrahapañjikā* (Kamalaśīla) : *Tattvasaṅgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā' of Shri Kamalshīlā*, 2 vols. ed. S. D. Shastri, Varanasi 1968, Rep. 1981.
- ŚBh *Śabarabhāṣya* (Śabarasvāmin) : see Frauwallner [1968].
- ŚV *Ślokaṅvārttika* (Kumārila Bhaṭṭa) : see Kāśikā, NR and ŚVV.
- ŚVV *Ślokaṅvārttikavyākhyā Tātparyatikā* (Umveka Bhaṭṭa) : *Ślokaṅvārttikavyākhyā Tātparyatikā of Umveka Bhaṭṭa*, ed. S.K. Ramana Sastri, University of Madras, Madras, 1940.

二次文献

Frauwallner, Erich

[1968] *Materialien zur Ältesten Erkenntnislehre der Karmamīmāṃsā*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien.

Gokhale, P. P.

[1997] *Hetubindu of Dharmakīrti, a point of probans*, Sri Satguru P ublications, India.

Ganganatha, Jha

- [1983] *Ślokavārtika, Translated from the original Sanskrit with extracts from the commentaries "Kasika" of Sucarita Misra and "Nyayaratnakara" of Partha Sarthi Misra*, Second Edition, Sri Satguru Publication, India.

服部 正明 (Hattori, Masaaki)

- [1968] *Dignāga, On Perception*, Harvard University Press, Cambridge.

本田 恵 (Honda, Megumi)

- [1996] 『クマーリラの哲学』上巻, 平楽寺書店, 京都.

計良 龍成 (Keira, Ryusei)

- [1994] 「paryudāsa と prasajya-pratiṣedha—非知覚因におけるその両者の無区別性について—」, 『インド哲学仏教学研究』2, 36-52.

Kellner, Birgit

- [1996] “There are no pots in the Ślokavārtika. ŚV abhāvapariccheda 11 and patterns of negative cognition in Indian philosophy”, *Journal of the Oriental Institute* 143-167, Baroda,.

- [1998] *Studies on Non-Cognition (anupalabdhi) in the logico-epistemological school of Buddhism*, 広島大学提出学位論文.

- [2001] “Negation - failure or success? Remarks on an allegedly characteristic trait of Dharmakīrti's anupalabdhi-theory”, *Journal of Indian Philosophy* 29, 495-517.

Mookerjee, Satkari and Nagasaki, Hojun

- [1964] *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti, An English translation of the first chapter with the autocomentary and with elaborate comments kārikās I-LI*, Nava Nalanda Mahavihara Research Publication, vol. 4, Patna.

護山 真也 (Moriyama, Shinnya)

- [2015] 「プラジュニャーカラグプタの〈知覚=存在〉説」, 『インド哲学仏教学研究』22, 175-190.

小川 英世 (Ogawa, Hideyo)

- [1984] 「Kaundabhaṭṭa の否定詞論」, 『広島大学文学部紀要』44, 75-97.

齊藤 仙邦 (Saito, Hisakuni)

[1993a] 「非知覚の定義をめぐる問題」, 『インド哲学仏教学研究』 1, 69-80.

[1993b] 「Hetubindu における Anupalabdhi について—anyabhāva と tadabhāva」, 『仏教文化』 30, 65-77.

Steinkellner, Ernst

[1967] *Dharmakīrti's Hetubinduḥ, Teil II, Übersetzung und Anmerkungen*, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien.

戸崎 宏正 (Tosaki, Hiromasa)

[1979] 『仏教認識論の研究—法称著『プラマーナ・ヴァールティカ』の現量論』上巻, 大東出版社, 東京.

山崎 次彦 (Yamasaki, Tsugihiko)

[1956] 「Ślokavārttika における ABHĀVA の概念」, 『印度学仏教学研究』 4-1, 262-265.

渡瀬 信之 (Watase, Nobuyuki)

[2013] 『マヌ法典』, 平凡社, 東京.

渡辺 俊和 (Watanabe, Toshikazu)

[2002] 「Dharmakīrti の非認識論—相反関係を中心に—」, 『南都仏教』 82, 54-80.

¹ クマーリラは非存在を決定する手段として、推論ではなく abhāvapramāṇa を挙げる。従って、正確には、仏教徒側から引用されるような論証形式を採用していない。

² viṣayasvabhāva upalabdhiḥ svaviṣayavijñānanayanayogyatālakṣaṇaḥ ; svaviṣayavijñānanayanayogyatālakṣaṇo viṣayasvabhāva upalabdhiḥ HBb 21,22-22,1.

³ anya upalambhajanayanayogyā eva svabhāvo 'nupalabdhiḥ ; anyopalabdhiyogyatāivānupalabdhiḥ HB_b 22,1f..

⁴ HBṬ 170,22-24 : **tasmād** upalabdhiḥjñānād **anyā** vastvantaraviṣayā **upalabdhiḥ** jñānātmikā **anupalabdhiḥ** (知を自体とする非認識は、その認識知とは別な [即ち] 別な事物を対象とする認識である)。

⁵ HBṬ 171,2f. : **paryudāsena** pratiśedhyasyārthasya varjanena yā viśi-

ṣṭe 'rthe vṛttis tayā, ... (相対否定により [即ち] 否定対象を除外することにより限定された対象を指示することによって, ...).

- ⁶ ここでの vivakṣita という用語に関して, Steinkellner [1967] では, 認識されないもの, 即ち, 意図された (vivakṣita) 認識とは別な認識が非認識であるというように解釈する. 一方で Kellner 氏は, anupalabdhī を語義解釈する際に, an-upalabdhī の nañ 接辞が, それが認識という表現によって意味される (vivakṣita) 認識とは別な認識を指していると解釈する. Cf. Kellner [2001].
- ⁷ HBṬ 170,25-29 : yathā bhakṣyābhakṣyaprakaraṇe vivakṣitād bhakṣyād anyatvād "abhakṣyo grāmyakukkuṭaḥ" bhakṣyo 'pi san tadanyasyocyate. yathā ca sparśanīyāsparśanīyādhikāre vivakṣitāt sparśanīyād anyatvād "asparśanīyaś cāṇḍālādiḥ" tadanyasya sparśanīyo 'pi san ucyate (例えば, 食されるべきものと食されるべきでないものに関する論題において, [食すという表現によって] 意味される食されるべきものとは別なものであることから, 村の鶏 (grāmyakukkuṭa) は, その [ブラーフマナなど] とは別な者にとっては食されるべきものではあるが, 食されるべきものではないと言われる. また, 例えば, 触れられるべきものと触れられるべきでないものに関する論題において, [触れるという表現によって] 意味される触れられるべきものとは別なものであることから, チャンダーラなどは, それ (ブラーフマナ) とは別な者にとっては触れられるべきものではあるが, 触れられるべきでないものであると言われる). HBṬĀ 386, 23 : tadanyasya brāhmaṇāder anyasya (それとは別なとは, ブラーフマナなどとは別な者 [という意味である]). ここで述べられている喩例はマヌ法典が根拠となっている. MS 5.19 : chatrākam viḍvarāham ca laśunaṃ grākukkuṭam / palāṇḍum gr̥ñjanaṃ ca eva matyā jagdhvā pated dvijaḥ // (茸・畜豚・大蒜・村の鶏・玉ねぎ・にらを意図的に食するとき, ブラーフマナはパティタとなる). MS 11.176 : caṇḍāla 'ntyastriyo gatvā bhuktvā ca pratigṛhya ca / pataty ajñānato vipro jñānāt sāmyaṃ tu gacchati // (ブラーフマナは, 知らずにチャンダーラ或いは最下層の女に近づき, [彼らの食べ物] を食し, [贈物を] 受け取るとき, パティタとなる. 意図的であるときは [彼ら] と等しくなる).

MS 5.85 : divākīrtim udakyāṃ ca patitaṃ sūtikāṃ tathā / śavaṃ tatspr̥ṣṭināṃ ca eva spr̥ṣṭvā snānena śudhyati // (チャンダラ・月経中の女・パティタ・出産後十日未満の女・死体, 彼らに触れた者—これらの者達に触れた時は沐浴によって清められる). MS の和訳は渡瀬 [1991] による. Cf. Steinkellner [1967 : 167,fn. 6].

⁸ HBṬ 171,22-26 : yadi viṣayasvabhāva upalabdhiḥ, katham̐ yogyatālakṣaṇaḥ. tathā hi yogyatā dharmah, dharmadharmaṇoś ca bheda eva ity ata āha, **yogyatāyā** ityādi. **yogyatā** hi paramārthato **bhāvarūpaiva** na vastusvarūpād bhidyate, anyathā bhāvo yogya eva na syāt. yogyatā 'syeti ca sambandho bhāvato* na syāt {sambandho bhāvato em. HBṬĀ 388,12 ; sambandhābhāvato HBṬ.} (【対論者】もし, 認識は対象の本質であるならば, どうして [対象の本質は] 能力を特徴としようか. 即ち, 能力は属性であり, そして属性と基体とは必ず区別がある. 【立論者】これ対して, [ダルマキールティは以下のように] 述べる. 能力云々と. 実に, 能力は勝義としては存在を性質とするのに他ならず, 事物それ自身から区別されない. そうでなければ, 存在が能力そのものではないことになってしまう. そして, その [存在] に能力があるという関係は実在としてないのである.)

⁹ HBṬ 171,29-172,3 : **tasmāt** pratiśedhyād ghaṭādeḥ svaviṣayajñānajanayogyād yo '**nya upalambhajanayogya eva**, na tadviparītaḥ **svabhāvo** ghaṭaviviktapradeśarūpaḥ, sa eva **cātrānupalabdhiśabdenocyate** (その自らの対象についての知を生ぜしめる能力を有する否定対象である壺などとは別なる, 正に認識を生ぜしめる能力がある—それ (認識を生ぜしめる能力があるもの) と逆なものではない—壺を欠いた場所を性質とする本質, それこそが, ここで非認識という言葉によって述べられる).)

¹⁰ HBṬ 172,3f. : prāktanam eva nyāyam atrādiśann āha, **pūrvavad** iti. vivakṣitopalabdher anyatvād abhakṣyāsparśanīyavat paryudāsavṛṭtyeti (正に先の論理をここで示そうとして [ダルマキールティは以下のように] 述べる. 以前に述べられた如くであると. 食されるべきでないものや触れられるべきでないもののように, 相対否定により [否定対象とは別なものを] 指示することによって, [非認識は「認識」という表現によっ

て] 意味される認識とは別なものだからである)。

¹¹ Cf. 小川 [1984].

¹² Cf. PVSV 4,9-11 : tathā hi sattvam upalabdhir eva vastuyogyātākṣaṇā tadāśrayā vā jñānapravṛttiḥ (即ち存在性は認識に他ならない。[その認識は] 事物の能力を特徴とするものか、あるいは、その [事物の能力] に依拠する知の生起である)。

¹³ Cf. 齊藤 [1993a], 齊藤 [1993b], 護山 [2015], 渡辺 [2002].

¹⁴ HBṬ 203, 3f : **abhāvavyavahāra eva**, nābhāvo 'pi tasya pratyakṣasiddhatvāt (非存在に関する取り扱いのみが [立証されるのであって]、非存在も [立証されるのでは] ない。何故ならば、その [非存在] は、直接知覚によって既に成立しているからである)。

¹⁵ HB 33,16f. : svabhāvānupalabdhyā tu vyavahāra evānupalabdhyā liṅgabhūṭayā* sādhyate {*tu vyavahāra evānupalabdhyā liṅgabhūṭayā ; tv anupalabdhyā liṅgabhūṭayābhāvavyavahāra eva HB_b 28,9f..} (一方で、[否定対象] それ自身の非認識においては、証相となった非認識によって、[非存在に関する] 行為のみが立証される)。

立証されるべき属性としての非存在に関する行為は、認識 (jñāna) ・言語表現 (abhidhāna) ・活動 (pravṛtti) の三種類に分類される。例えば、認識のための特徴を備えた壺が認識されない場合に、「壺が存在しない」という認識や言語表現、また「壺が存在しない場所を行き来すること」という活動とが、非存在に関する行為に相当する。 Cf. HBṬ 174,28-30 :

abhāvavyavahāras ca jñānābhidhānapravṛtilakṣaṇaḥ. tatra nāsty atra ghaṭa ity evamākāraṃ jñānam, evaṃvidhavastvabhidhāyakaṃ cābhidhānaṃ, niṣāṅkasya ca tatra pradeśe gamanāgamanalakṣaṇā pravṛttir iti. PVSV 4,8, NBṬ 122,1-3, Kellner [1998 : 88], 計良 [1994 : fn. 2] .

¹⁶ yenānyabhāvarūpānupalabdhyā 'bhāvavyavahāraḥ sādhyate ; yenābhāvavyavahārānupalabdhir abhāvavyavahāraṃ sādhyed iti cet HB_b 22, 11f..

¹⁷ HBṬ175,1-3 : atreśvarasenakumārilayor vacanāvākāśam āśāṅkya siddhāntavyavasthām eva kurvatā tanmate niraste 'py āhatya tanmatan-

irāsārtham āha, **katham anyabhāva** ityādi (ここで、イーシュバラセーナとクマーリラとは論難 (vacanāvakāśa) があると仮定して、定説の確定のみをなす者 (ダルマキールティ) によって、その [両者の見解] は既に否定されているにも関わらず、[更に] 批判し、その [両者の] 見解を退けるために [以下のように] 述べる。何故、別なものの存在が云々と)。

- ¹⁸ イーシュヴァラセーナに関する議論の概略は次の通りである。イーシュヴァラセーナは非認識を相対否定ではなく純粹否定 (prasajyapratīṣedha) として考える。そしてその非認識によって非存在が立証されると主張する。それに対して、ダルマキールティはその純粹否定としての非認識は言い換えれば認識の非存在であるため、その認識の非存在を立証するために更なる別な非認識を論証因として立てなければならないという無限遡及になってしまうと論難する。HB 27,3f. : ... na pratīṣedhamātram ihānupalabdhiḥ*, tasya sādhanāsiddher abhāvavyavahārāsiddhiprasaṅgāt {*ihānupalabdhiḥ om. HB_b 22,13f..} (ここでの非認識は単なる純粹否定ではない。何故ならば、[もし、非認識が純粹否定であるならば]、その [純粹否定を自体とする認識の非存在] を立証することは、成立しないために、非存在に関する行為が成立しないことになってしまうからである)。HBT 176, 11-14 : atha vā **tasya** prasajyapratīṣedhātmana upalabdhyabhāvasya **sādhanam** eva kiñcin na sidhyati*. sa hy abhāvatvād apareṇopalabdhyabhāvena sādhyah syāt, so 'py apareṇety anavasthānam {*sidhyati HBT_{MS} 168a2 ; sidhyatīti HBT 176,13} (あるいはまた、その純粹否定を自体とする認識の非存在を正に立証することは何ら成立しないと。というのも、その [純粹否定を自体とする認識の非存在] は非存在であるから、別な認識の非存在によって立証されるだろう。更にその [別な認識の非存在] も [更に] 別な [認識の非存在によって立証される] という無限遡及になる)。Cf. PVSV 4,15-17.

- ¹⁹ ŚV abhāvapariccheda 11 : pratyakṣāder anutpattiḥ pramāṇabhāva ucyate / sātmano 'pariṇāmo vā vijñānaṃ vānyavastuni // {*apariṇāmo ŚVV 411,22, HBT 167,11, HBTĀ 380,28f. TSP 577,12,15-17; pariṇāmo NR 337,22, Kāśikā 198,9f..} (直接知覚などの生起しないことは、認識手段の非存在と [シャバラスヴァーミンによって] 言われる。その

[認識手段の生起しないこと] は、[壺の非存在を導出する、5種の認識手段の非存在という意味での] アートマンの非転変か、或いは[捨てることなどを導出する、壺の非存在を意味する] 別な事物に対する認識である)。11偈に関しては、Kellner [1996]の詳細な研究があり、和訳は Kellner [1996] を参照した。

1ab 句は Kellner 氏によると、シャバラスヴァーミンの言説である。Kāśikā III 198,7 : evaṃ tāvat nāstīty asyārthasyāsannikṛṣṭasya iti yad uktam bhāṣye tad vivṛtam. idānīm pramāṇābhāvaśabdaṃ vyācaṣṭe (以上のように、まず近接していないその対象に関して存在しないとミーマーンサーパーシュヤで述べられることが明らかにされる。ここで、プラマーナの非存在という語が述べられる)。ŚBh 32,9f. : abhāvo 'pi pramāṇābhāvo nāstīty asyārthasyāsannikṛṣṭasya. 次に c 句に関しては、クマールラ説における認識の生起を、外界対象によって引き起こされたアートマンが、対象に対する認識主体、或いは認識対象の相を持って転変する場合に生じるものであり、そのアートマンの転変がない場合には、5種の肯定的な認識手段は存在しないと Kellner 氏は指摘する。TSP 577,11-17 ad. TS 1656 : tatra kumārīlena trividho 'bhāvo varṇitaḥ. ātmano 'pariṇāma ekaḥ. padārthāntaraviśeṣajñānaṃ dvitīyaḥ, sātmano 'pariṇāmo vā vijñānaṃ vānyavastuniti vacanāt. pramāṇanivṛttimātrātmakas tritīyaḥ. また、d 句については、「別な事物に対する認識」が、否定対象とは別なものの存在を示唆しているのではなく、否定対象の非存在を紹介しているものだとして Kellner 氏は指摘する。NM I 131,10 : anyavastuśabdena ghaṭābhāva evoktaḥ. Kāśikā 192,2f. : ātmano 'pariṇāmo vā nāstīti vā 'bhāvajñānam iti.

更に Kellner 氏は、アートマンの非転変、つまり5種の認識手段の非存在 (pramāṇa 1) によって、壺の非存在 (pramāṇaphala 1) が導かれ、その後、壺の非存在が認識手段となって (pramāṇaphala 1 = pramāṇa 2), 取捨選択などの行為 (pramāṇaphala 2) が導かれるという関係があることに言及している。ŚV 412,6-10 : ayam āśayaḥ "iha pradēse dṛṣyādarśanaṃ cāsti, tadanantaram "ghaṭo nāsti" iti jñānaṃ cotpadyate. tatra ghaṭābhāve prameye dṛṣyādarśanam eva kadācit pramāṇa-

tvena vivakṣyate, tadā sātmano 'pariṇāmo veti pakṣaḥ. atha tadan-
antaram "nāsti" iti jñānaṃ yat, tat pramāṇatvena vivakṣyate,
bodhakatvena bodhakapratyayābhāvena ca, tadā vijñānaṃ vānyavas-
tunīti pakṣaḥ. Kāśikā 198,11-14 : tatprāmāṇye ca nāstīti jñānaṃ phal-
am. nāstīty eva vā bhāvajñānaṃ pratyakṣādyanutpattir ity ucyate,
atas tad eva pramāṇam, hānādibuddhiḥ phalam iti vivekaḥ. 同様の
記述は NR 337,26-28にも確認される。

²⁰ indriyair eṣā NR, Kāśikā ; indriyenaishā ŚV.

²¹ ŚV abhāvapariccheda 24 : sadguṇadravyarūpeṇa rūpāder ekateṣyate
/ svarūpāpekṣayā caiṣāṃ parasparavibhinnatā // (有・属性・実体の
あり方として、色などの同一性 (ekatā) が認められる。しかし、本性の
観点からは、これら (色など) は相互に区別される)。ŚV sūnyavāda 98.

²² ニャーヤ学派は感官と対象との接触を六種に分け、その内で、結合したもの
についての限定者であることから、非存在が把握されると主張する。
NR 339,25-29 : tatra pratyakṣagamyatvaṃ naiyāyikā manyante, tad
dhi "indriyārthasannikarṣotpannaṃ jñānaṃ". ṣaḍvidhaś ca sannikar-
ṣaḥ, ... saṃyuktaviśeṣaṇatvād abhāvagrahaṇam, aphaḷavati śākheti
(それに対して、ニャーヤ学派は「非存在の部分は」直接知覚によって把
握されるべきものであると考える。即ち、「知は、感官と対象との接触か
ら生じる (NS 1.1.4)」。そして、接触は六種である。 ... 「感官と」結合
したものについての限定者に基いて (saṃyuktaviśeṣaṇatvāt), 非存在を
把握する。「枝は果実を持たない」と)。ŚV 414,11f. : saṃyuktaviśeṣaṇ-
atvād abhāvagrahaṇam, yathāphaḷavati* śākhety {*yathāphaḷavati
NR 339,29 ; yathā phalavati ŚV.}. NBhū 168,11-13 : tatra saṃyukt-
aviśeṣaṇabhāvenābhāvāsya grahaṇam, yathā ghaṭasūnyaṃ bhūtaḥ
ity atra ghaṭābhāvaḥ indriyasamyuktabhūtalaviśeṣaṇatvena* pratiya-
te, bhūtale ghaṭo nāstīty atra viśeṣyatveneti {*indriyasamyuktabhū-
talaviśeṣaṇatvena em. ; indriyasamyuktabhūtalaviśeṣaṇatvena.} (その
内で、結合したものについての限定者の関係によって、非存在を把握する。
例えば、「地面は壺を欠く」というこの場合には、壺の非存在は、感官と
結合した場所についての限定者として、理解される。「地面に壺が存在し

ない」というこの場合には、[壺の非存在は] 被限定者として理解される)。NM I 191,10-12 : saṃyuktaviśeṣaṇabhāvād abhāvagrahaṇaṃ vyākhyātam. iha ghaṭo nāstīti cakṣuṣā saṃyukto bhūpradeśaḥ tadviśeṣaṇībhūtaś cābhāva iti. PVA 347,22 : pradēse ghaṭābhāvenendriyasya saṃyuktaviśeṣaṇaviśeṣyabhāvaḥ.Cf. Hattori [1968 : 40], 戸崎 [1979 : 401-403].

尚、結合したものであるものの限定者に関する詳しい考察は紙面の関係上、省略する。

- ²³ 同様の議論は、ŚV śūnyavāda 章でも述べられている。ŚV śūnyavāda 89 ab : udbhāvābhībhāvābhīyāṃ ca grāhyāgrāhyatvadārśanam / (また、顕在と伏在とによって、把握されるべきものと把握されるべきでないものとが見られる)。NR 210,18f. ad. ŚV śūnyavāda 95 : na hy ekasya yugapad yogyāyogyatvam udbhāvābhībhāvātmakatvaṃ vā sambhavati, viruddhadharmādhyāśena bhedāpatter iti.
- ²⁴ 本稿では具体的に取り上げないが、二種の根拠の内、感官と対象との結合の有無について簡潔に紹介する。ニヤーヤ学派などは、非存在についても、直接知覚によって非存在も把握対象になりうるとクマーリラに対して反論する。それに対して、クマーリラは、感官は存在の部分についてのみ適用されるものであって、非存在に対しては感官との結合を予想しない場合に把握されるものとする。Cf. ŚV abhāvapariccheda 21 : idam eva nimittam ca vivekasya pratīyate/ bhāvābhāvādhiyor akṣaiḥ sambandho 'kṣānapekṣaṇam // (また、次の区別の原因が理解される。存在の知には感官との結合と、非存在の知には感官を予想しないことがある)。
- ²⁵ Kāśikā 201,23-26 : bhede kāraṇam āha, **udbhaveti**. bhāvābhāvayor apy udbhūtābhībhūtayor **grahaṇā**grahaṇavyavasthā dr̥śyate. na caitad ekatve kalpīte. na hy ekam eva tattvam udbhūtam abhībhūtaṃ ceti pratīyata iti (区別についての原因を [以下のように] 述べる。顕在 (udbhava) と。顕在した存在と伏在した非存在との両者ともに基づいて、把握と非把握との確立が理解される。しかし、同一であると構想される場合には、この [把握と非把握との確立] はない。というのも、顕在したものと伏在したものが、同一の実在に他ならないとは理解されないからである)。

- ²⁶ ŚV abhāvapariccheda 26 : tatsambandhe* sad ityevaṃ tadrūpatvaṃ
 pratīyate / nāsty atredam itīdaṃ tu tadasaṃ yogahetukam //
 {*tatsambandhe NR 341,15, HBṬ 188,6 ; satsambandhe Kāśikā 203,5,
 ŚVV 415,7.} (その [感官] と [対象とが] 結合する場合に、存在する
 いうように、その [存在] のあり方が理解される。一方で、「これはここ
 に存在しない」というこのことは、その [感官] と [対象とが] 結合しな
 いことを原因とする)。
- ²⁷ yatrendriyasannikṛṣṭaḥ em. ; yatrāndriyasannikṛṣṭaḥ.
- ²⁸ anyenābhāvāṃśenopagatena HBṬ_{MS} 168b1 ; anyenābhāvāṃśopagatena
 HBṬ.
- ²⁹ HBṬĀ 390,26 : **anyathā** bhāvarūpasamśrṣṭatvaprakāreṇa (そうでな
 ければとは、存在の特質との結合性という仕方では [という意味である])。)
- ³⁰ HBṬĀ 390,26f. : **tadayogāt** tasyābhāvāṃśasyāyogāt (それはありえな
 いからとは、その非存在の部分がありえないからである)。
- ³¹ HBṬĀ 390,27 : **sā** pararūpasamśrṣṭarūpatā (それとは、他体と結合して
 ないことである)。
- ³² 同様の議論は HB 28,16-29,6でも確認される。
- ³³ HB 32,5-7 : tasmāt kvacit pramāṇaṃ pravṛttaṃ tat paricchinatti, ta
 to 'nyad* vyavacchinatti, tṛtīyaprakārābhāvaṃ** ca sūcayatīty ekap-
 ramāṇavyāpāra eṣaḥ (*tato 'nyad; tadanyad HB_b 26, 24. ** tṛtīyapr-
 akārābhāvaṃ ; tṛtīyaprakārāntarābhāvaṃ HB_b 26, 24.) (従って、何ら
 かのもんに対して活動する認識手段がその [認識されているもの] を措定
 し、その [認識されているもの] とは別なものを排除し、また、第三の種
 類がないことを示唆するというこのことが、一つの認識手段の作用である)。
 Cf. 渡辺 [2002 : 67].
- ³⁴ HBṬ 180,9-11 : dvidvidho hy ayaṃ pradeśo ghaṭāsamśrṣṭarūpaḥ, tadv-
 yāvṛttarūpatayā tato 'nyo ghaṭavān api, kevalāś ca ghaṭaṃ praty
 apratipannādhārahāvaḥ (実に、壺と結合していない本体を有するこの
 場所は、二種類である。[第一が] 壺を有するが、その [壺] から排除さ
 れた本体を有するという点で、その [壺] とは別な [場所] である。また、
 [第二が] 壺に対する保持者となっていない単独な [場所] である)。